

【付記】

本稿は平成10～12年度科学研究費補助金による基盤研究(c)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者 石井久雄, 研究課題番号 JSPS 22520478)の成果の一部である。

『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法

六割に達する使用度数を持つ連用形である。連用形は名詞形（遊び・歩き）でもあり、複合語を作るにもそのまま前項となる（遊びくらす・歩きまわる）。（中略）従って、動詞を連用形（起き・受け）で見出しとすれば、文献に出てくるままの形で語を検索できる割合が高い。動詞と名詞との関連も把握しやすい。そして、終止形を求め出す困難なしに動詞項目を引くことができるであろう。これは、連用形が動詞の基本形であるという国語史的事実の反映である。」

- ⑤ 本稿では意味・用法の分類はしないが、「言ふ」の謙讓語である「申す」にもこの用法が見られる。

「(略) 故典侍大と申し、雅忠と申し、心ざし深くさぶらひし、『形見にも』など申し置きしほどに」など申されしかば（I 266-7）

『日本国語大辞典』第二版で、「～と言ひ、～と言ひ」の初出例として、以下の例が挙げられる。

南都炎上の事、王命といひ、武命といひ、君につかへ、世に従ふ法のがれがたくして（『平家物語』10 戒文）

『平家物語』の成立は、鎌倉時代前半、13世紀前ごろと言われている。『とはずがたり』の作者、後深草二条は1258年の生まれで、没年は不明だが、1306年までの記事があることは確かである。「～と言ひ、～と言ひ」と重ねて用いて、事柄を並べる用法がどのように成立したのかについては稿を改めることとし、ここでは、『とはずがたり』で、「言ふ」の意味・用法のうち、1.7%が、その用法であること、謙讓語の「申す」にもその意味・用法があることを述べるにとどめる。

【調査資料】

久保田淳校注・訳（1999）『建礼門院右京大夫集 とはずがたり』新編日本古典文学全集 47 小学館

【参考辞書】

北原保雄編（2010）『明鏡国語辞典』第2版 大修館書店

中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編（1982）『角川古語大辞典』角川書店

日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第2版（2000）小学館

室町時代語辞典編修委員会（2000）『時代別国語大辞典』室町時代編 三省堂

松村明編（2006）『大辞林』第3版 三省堂

【参考文献】

磯部佳宏（2012）『「とはずがたり」における動詞「聞く」の意味用法』『山口大学文学会誌』62

岩井良雄（1983）『とはずがたり語法考』笠間叢書174 笠間書院

大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編（1974）『岩波古語辞典初版』岩波書店

辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引』【自立語編】笠間索引叢刊99 笠間書院

東郷吉男（1980）『「言ふよしなし・言ふかたなし・言ふばかりなし・言ふかぎりなし」考——中古の用例について——』『京都教育大文学会誌』15

福田秀一校注（1978）『とはずがたり』新潮日本古典集成 新潮社

村田正英（2007）『中古・中世女流日記文学作品における「～といふ（所）」の働き——『蜻蛉日記』『更級日記』『うたたね』『十六夜日記』『とはずがたり』』尾道大学日本文学論叢（3）

- ㊦ 文字に書いた文章によって、考えや事柄を表出する。2例
- ㊧ 歌を詠む。歌う。6例
- ② 《形式的用法》①の、実際に話したり書いたりするという具体的な動作性が弱まって、形式化した用法。(203例 43.8%)
 - ㊱ 多く「…といふ」の形で、名は…であるという意味を表す。103例
 - ㊲ 多く「…といふ」の形で、次にくる語の内容を具体的に説明する。60例
 - ㊳ 話の内容が伝聞に基づくことを表す。10例
 - ㊴ 「…といへども」「…といひながら」「…といふも」「…といふとも」の形で、「確かに…であるがしかし…」「…だが、しかし…」などの意味で、接続詞的に用いられる。17例
 - ㊵ 「…といひ、…といひ」の形で、二つ以上の事柄を例示して、そのどれもという意味を表す。8例
 - ㊶ 「…ともいはず」の形で、「…であるにも関わらず」の意味を表す。3例
 - ㊷ 「…といはば」の形で、「…といったならば」の意味を表す。1例
 - ㊸ 副詞「など」が付いた「などいふ」の形で物事や事柄が定かでないものとして示し、「どういう」の意味となる。1例
- ③ 《連語》その他、連語としたもの。(21例 4.5%)
 - ㊱ 「言はむかたなし」10例、㊲ 「言ふかひなし」7例、㊳ 「言ふにや及ぶ」1例、
 - ㊴ 「言ふばかりなし」2例、㊵ 「言ふべくもあらず」1例

今後、「言ふ」の意味・用法の記述をさらに充実させ、他の作品との比較を行う。また、『とはずがたり』において、「言ふ」の同義語である「申す」「奏す」「語る」などの語について、意味・用法の分類、記述と用例数を調査するつもりである。

注

- ① 「書きにくし」などのような動詞の連用形に形容詞が続く例は、「言ふ」に関しては見られなかった。
- ② 『とはずがたり』における「言ふ」の用法で、動詞と動詞の間に助詞が入った例は、この2例のみである。
- ③ 岩井(1983)に、「『日はく一言ふ』の構造は、鎌倉時代には他書にも多く見える。漢文訓読調の影響かと思えるが、平安時代にも見える構造である。『とはずがたり』にはこの2例のみである。国語独特の表現方法である。」とある。
- ④ 大野(1974)の「序にかえて」で、動詞の項目の見出しに関して、次のように述べたうえで、連用形を見出し項目としている。「動詞は終止形を見出し項目として配列するのが普通である。しかし、終止形は実は全活用の中で、わずか一割前後の使用度数しか持たない。最も多いのは

その他の例は、すべて、子どもっぽくて物事のわきまえがないという意味である。

③⑦ 言ふかひなき北面の下臆風情の者などに一つなるふるまひなどばし候ふなど
(I 276-01)

③⑧ 「節分にてもなし。何の御方違へぞ」と言へば、「あら言ふかひなや」とて、皆人笑ふ。(I 198-10)

③ (㉔) 「言ふにや及ぶ」は、『角川古語大辞典』には、「いうまでもない」という意味で、『言ふに及ばず』を強調した反語表現、『時代別国語大辞典室町時代編』では、『や』は反語の助詞。わざわざ取り立てて言う必要もない、わかりきったことであるの意を表わす。応答の語として間投詞的に用いられる。」とし、共に『太平記』の例を挙げる。

③⑨ 「ゆゆし」、「めでたし」など言ふ人もなかりき。言ふにや及ぶ、「かかることやは」とも言ふべきことは。(I 249-13)

③ (㉕) の「言ふばかりなし」は、2例見られる。何とも言いようがない。言葉では言いつくせないという意味になる。

④⑩ 露台の乱舞、御前の召し、おもしろくとも言ふばかりなかりしを、なほなごり惜しとて、(II 318-10)

④⑪ 善光寺の先達に頼みたる人、卯月の末つ方より大事に病み出だして、前後を知らず。あさましとも言ふばかりなきほどにすこしおこたるにやと見ゆるほどに
(IV 434-09)

③ (㉖) 「言ふべくもあらず」は1例のみ見られる。言葉では表現できない、ことのほかすばらしいの意味となる。

④⑫ 釣殿遠く漕ぎ出でて見れば、旧苔年経たる松の枝さし交したる有様、庭の池水言ふべくもあらず。(III 420-5)

4. まとめ

以上、『とはずがたり』における「言ふ」464例の意味・用法について述べた。以下にその説明と用例数をまとめる。

- ① 《具体的用法》声を出して語や文を発したり、音声または文字に書いた文字によって考えや事柄を表出する。(240例 51.7%)
 - ㉑ 直前の発言を助詞「と」で受ける。177例
 - ㉒ 言葉で表すという発言行為そのものを表す。40例
 - ㉓ 物事などを別の言葉で表現し、判断や評価をする。15例

② (㉞) は、「…ともいはず」の形で、「…であるにもかかわらず」の意味を表す。『とほすがたり』では、3例見られ、すべて「改まる年ともいはず」の形で用いられる。

③2 昔を思ふ涙は、改まる年ともいはず、ふるものなり。(IV446-12)

② (㉟) は、「…といはば」の形で、「…といったならば」の意味を表す。『とほすがたり』ではこの用例のみである。

③3 齋宮は二十に余りたまふ。ねびととのひたる御さま、神もなごりを慕ひたまひけるもことわりに、花といはば、桜に喩へても、よそ目はいかかと誤たれ (I 268-3)

② (㊱) は、副詞「など」が付いた「などいふ」の形で物事や事柄が定かでないものとして示し、「どういう」の意味となる。『とほすがたり』では副詞の後について…のような、の意味の連体修飾句を作るのはこの用例のみである。

③4 八坂の寺の長老呼びたてまつりて、頂剃り、五戒受けて、蓮生と名付けられて、やがて善知識と思はれたりしを、などいふことにか、三条の尼上、「河原院の長老浄光房といふ者に沙汰せさせよ」としきりに言ひなして、それになりぬ。(I 228-11)

3. 2. 4 ③《連語》

連語として扱った用例は、③ (㊲)「言はむかたなし」10例、③ (㊳)「言ふかひなし」7例、その中には「言ふかひなさ」1例を含む。③ (㊴)「言ふにや及ぶ」1例、③ (㊵)「言ふばかりなし」2例、③ (㊶)「言ふべくもあらず」1例、合計21例である。

③ (㊲)「言はむかたなし」はどう言ったらよいかわからない、たとえようもない、言いようがないという意味で、善悪ともに用いられるが、『とほすがたり』では10例のうち、9例が③4のようにマイナスの感情を表現したものである。③5は二見の浦の月夜がおもしろいというので、女房たちと出掛け、そのときの様子を述べたものであり、この例のみがプラスの評価を表している。

③5 「(前略)あまたの愁へにまさりて、悲しさもあはれさも、言はむ方なくはべる」よし、泣く泣く奏せらるれば、(I 224-14)

③6 まことに心留まりて、おもしろくもあはれにも、言はむ方なきに、夜もすがら渚にて遊びて、(IV471-15)

③ (㊳) の「言ふかひなし」は、名詞形の「言ふかひなさ」1例を含め、7例見られる。そのうち、会話で使用されているのが5例である。③6の「言ふかひなし」は、北面の下臈風情の者にかかっているの、とるにたりない身分、存在であるの意味であるが、

24) あの御片端は、いませおはしましたる下に、御腫物あり。この腫物といふは、我らがやうなる無知の衆生を多く後へ持たせたまひて、これを憐みはぐくみおほしめすゆゑなり。(V523-5)

25) 小林といふは、御母が母、宣陽門院に、伊予殿といひける女房、おくれまゐらせてさま変へて、即成院の御墓近くさぶらふ所へ尋ね行く。(II321-15)

25)の例は、福田(1978)の頭注に『『小林といふ所へ』と書きかけて、その小林を説明する必要を感じ、『小林といふは、…候ふ所へ』と文脈が屈折した(挿入句を含んだ形に近い)もの。『小林』は伏見の地名。」とある。このような例が『とはずがたり』にはもう1例²⁶⁾見られる。

26) 皆人、不思議の思ひをなして見まゐらするに、祝詞の師といふは、神にことさう御むつましく宮仕ふ者なりといふが参りて、(IV463-9)

②(㉔)は、助詞「と」で受けて、世間で人々が言っていることを伝聞した、あるいは、間接的に他人から聞いたこととして、ある事柄を取り上げることを示す。この用法は10例である。

27) かくて、長月のころにや、法皇御悩みと言ふ。(I213-16)

28) 事ども始まりて、案内を申さる。興に入らせたまひて召さる。姉妹といふ。(II341-10)

②(㉓)は、「…といへども」「…といひながら」「…といふも」「…といふとも」の形で、「確かに…であるがしかし…」「…だが、しかし…」などの意味で、接続詞的に用いられる。「…といへども」が最も多く11例、「…と(は)いひながら」が3例、「…といふとも」2例、「…といふも」1例、合計17例である。

29) 二つにて母に別れしより、我のみ心苦しく、あまた子供ありといへども、おのれ一人に三千の寵愛もみな尽くしたる心地を思ふ。(I226-16)

②(㉒)は、「…といひ、…といひ」の形で、二つ以上の事柄を例示して、そのどれもと意味を表す⁵⁾。この用例は「言ふ」ごとに数えているので8例となる。

30) 京極の女院と申すは、実雄の大臣の御女、当代の後、皇后宮とて、御おほえも人にはことにて、春宮の御母にておはしますうへは、御身がらといひ、御年といひ、惜しかるべき人なりしに、(I232-7)

31) 高岡の石見の入道といふ者あり。いと情けある者にて、歌常に詠み、管絃などして遊ぶとて、かたへなる修行者、尼にさそはれてまかりたりしかば、まことにゆゑある住まひ、辺土分際には過ぎたり。彼といひ此といひて、慰む便りもあれば、秋までは留まりぬ。(IV448-4)

見られた。

- (15) 「柿本の紀僧正，一旦の妄執や残りけむ」といふわたりを言ふ折，善勝寺，きと見おこせれば，(Ⅱ344-9)
- (16) 「いさやいかか」とのみおぼゆれば，「なき世なりせば」と言ひぬべきにうち添へて，(Ⅰ204-10)

3.2.3 ②《形式的用法》

ここでは，実際に話したり書いたりするという具体的な動作性が弱まって形式化した用法について見ていく。ある語句を助詞「と」で受けて，一般に呼称されている，名は…であるということを表す用法は(㉑)，「と」で受ける語句の意味を具体的に説明し，その語句と被修飾語とをつなぐ用法は(㉒)とした。そのほか，伝聞(㉓)，接続詞的な用法をそれぞれ記述，分類していく。

まず，最も多いのは，「…といふ」などの形で，名は…であるということを表す用法②(㉑)で，103例である。これは，《形式的用法》の50.7%である。この用法の「言ふ」は，103例のうち94例が連体形である。

- (17) 二十日余りのほどに，江の島といふ所へ着きぬ。(Ⅳ430-14)
- (18) 心憂く悲しくて，泣く泣く足摺をしたりけるより，足摺の岬といふなり。(Ⅴ490-8)
- (19) 三条の尼上，「河原院の長老浄光房といふ者に沙汰せさせよ」としきりに言ひなして，それになりぬ。(Ⅰ228-12)
- (20) 徒歩なる女房の中に，ことに初めより物など申すあり。問へば，兵衛佐といふ人なり。(Ⅴ527-14)
- (21) いたう崩れ退きたる所に，さるとりといふ茨を植ゑたるが(Ⅰ236-12)
- (22) 「いかに」と申せば，「わが身が鴛鴦といふ鳥となりて，御身の内へ入ると思ひつるが(Ⅲ386-15)

次に，②(㉒)は，多く「…といふ」の形で，後に続く語の内容を具体的に説明する用法である。㉓の「いふ」は院の仰せの具体的な内容を前で述べている。この用法は60例見られる。

- (23) 「面々引出物思ひ思ひに，一人づつして，さまざま能を尽くして，しひよ」といふ仰せこそ。(Ⅱ284-8)

②㉒の中には，「…といふは」の形で，主語にたち，「と」で受ける語句を取り立てて示し，主題を提起する用法もある。

けて、判断や評価を示す用法 (㉔) について検討する。判断や評価の内容は助詞「と」で受ける。

- (11) 道すがらも、今しも盗み出でなどして行かむ人のやうに契りたまふも、をかしとも言ひぬべきを、つらさを添へて行く道は、涙のほかは言問ふ方もなくて、おはしまし着きぬ。(I 207-1)
- (12) 思はずながら、不思議なりつる夢とや言はむなどおぼえて居たるに、(II 293-13)

(11)は、変わらぬ愛情を誓うという院の行動について、「をかし」と評価し、それを表明している。(12)は、この前に起こった「有明の月」が自分に言い寄って来たという出来事を、「わけのわからない夢」と別の言葉で表現している。この用例は、「言ふ」に助動詞を伴う。「言ひぬべし」7例、「言ふべし」4例、「言はむ」3例、「言はまし」1例で、合計15例である。

次に、文字に書いた文章によって、考えや物事を表出する用法 (㉕) について見てみる。(13)は、善勝寺の大納言へのお見舞いを書いて、…と(手紙で)言ったという意味である。『とはずがたり』において、手紙で文字に書いた文章によって考えや物事を言うと解釈し得るのは、この2例である。

- (13) 善勝寺の訪ひ言ひて、「これにはべりけるに、思ひがけず尋ね参りたり。見参せむ」と言ひたり。(II 331-4)

『とはずがたり』において、文字に書いた文章によって、考えや物事を表出する場合は、「書く」あるいは、「とある」などを用いている。

- (14) 昼つ方、思ひよらぬ人の文あり。見れば、
雪の曙 「今よりや思ひ消えなむひとかたに煙の末のなびきはてなば
これまでこそ、つれなき命も長らへてはべりつれ。今は何事をか」などあり、
「かかる心のあとのなきまで」とだみつけにしたる縹の薄様に書きたり。「しのぶの山の」とある所をいささか破りて、
二条 知られじな思ひ乱れて夕煙なびきもやらぬ下の心は
とばかり書きて遣はししも、とは何事ぞと、我ながらおぼえはべりき。(巻 I 203-5)

最後に、歌を詠む、歌う (㉖) の意味・用法について見る。(15)は、若菊という白拍子が今様を歌う場面である。(16)の「なき世なりせば」は古今集の歌を引き、後深草院の言葉を本当とは思われない気持ちを述べた箇所である。これは古歌の引用であるので、歌を詠むに分類した。(15)の今様を歌う1例以外は、すべて歌の句の引用で5例、合計6例

3.2.2 ①《具体的用法》

ここでは、声を出して語や文を発したり、音声または文字に書いた文章によって考えや事柄を表出する具体的な動作を示す用法について述べる。実際に発言を受けるかどうかで、(㉔)と(㉕)に分けた。(㉖)は何か言葉を発したというよりも、別の言葉で表現し、評価をするという意味で、(㉗)は言葉ではなく、文字による点が異なる。(㉘)は歌を詠む、歌うという意味である。

- ㉔ 助詞「と」で発言を受ける。
- ㉕ 言葉で表すという発言行為そのものを表す。
- ㉖ 物事などを別の言葉で表現し、評価をする。
- ㉗ 文字に書いた文章によって、考えや事柄を表出する。
- ㉘ 歌を詠む。歌う。

①《具体的用法》の240例は、ほとんどが(6)のように直前の発言を助詞「と」で受ける用法(㉔)で177例見られた。これは、《具体的用法》の73.8%を占める。

(6) 大納言、「なべてならず色も匂ひも見ゆるは、御所より賜はりたるか」と言ふも、胸騒がしくおぼえながら、(I 197-9)

ただし、(7)のように「言ふ」を用いずに、「とて」のみで発言を受ける例も多く見られる。本稿では、「言ふ」との関連性や用例数など検討していない。今後の課題である。

(7) 何心なく、小さき女の童開けたれば、「差し入れて、使はやがて見えず」とて、またありつるままの物あり。(I 197-3)

次に、言葉で表すという発言行為そのものを表す意味・用法(㉕)について述べる。(8)の例は、「特に話しておかなければならないことがあって」の意味で、発言行為を表している。(9)の例は、始めの「言へば」は発言を受けているが、後の「言ふ」は「とかくのこと」を具体的な動作として「言って」いるのである。また、(10)のように、「物を言う」という表現も5例見られた。「言ふ」のク語法である「いはく」2例もここに含めると、この用法は40例見られた。

(8) いと心得ぬ心地すれど、開けたるに、網代車にいたうやつしつつ、入らせおはしましたり。思ひよらぬことなれば、あさましくあきれたる心地するに、「さして言ふべきことありて」とて、こまやかに語らひたまひつつ、(III 381-16)

(9) 「ここさへ晴にあふべきか。かくしつらはれたるは」など言へば、皆人笑ひて、とかくのこと言ふ人なし。(I 198-14)

(10) 暗きやうにて、衣の下にていと物も言はねば、(I 257-9)

次に、物事などについて、別の言葉で表現したり、評価を表す形容詞や形容動詞を受

12)

(4) また小野小町も衣通姫が流れといへども、簀を肘にかけ、蓑を腰に巻きても身の果てはありしかども (IV433-6)

(5) 母の尼上など来集まりてそそめく時に、「何事ぞ」と言へば、大納言うち笑ひて、「いさ、『今宵御方違へに御幸なるべし』と仰せらるる時に (I 198-6)

「言ふ」において、連体形が多いということは、後に名詞が続くということであり、1. はじめに、で述べたように「二条といふ名」のような形式的な用法が多いということが予測される。また、「言へば」で見たように、「言ふ」には、実際の発言を受けて、誰かが音声の形で言葉に表したという動作を示す具体的な用法も当然多く用いられる。本稿では、このような観点から、「言ふ」の意味・用法について、分類、記述をしていきたい。

『とはすがたり』における「言ふ」の意味・用法

3.2 意味・用法による分類

『とはすがたり』における「言ふ」の意味・用法を次のように大きく3つに分類する。

①《具体的用法》は実際に言ったり書いたりという動作性を持つ「言ふ」であり、②《形式的用法》は「言ふ」の動作性が弱まった形式化した用法である。③《連語》は、「言ふ」だけではなく、他の語と結びついた連語として扱ったほうがよい用法である。

3.2.1 意味・用法の偏り

3.2で大きく分類した意味・用法の用例数を〈表2〉にまとめる。『とはすがたり』において「言ふ」は、全用例464例のうち、①《具体的用法》が240例で全体の51.7%、②《形式的用法》が203例で全体の43.8%であり、やや①《具体的用法》が多いものの、②《形式的用法》もかなり多く用いられていることがわかる。

〈表2〉『とはすがたり』における「言ふ」の用法

①《具体的用法》	240	51.7%
②《形式的用法》	203	43.8%
③《連語》	21	4.5%
合計	464	100.0%

これより、それぞれの用法について、詳細に見ていく。

2.3 調査対象とする「言ふ」

本稿では、「言ふ」を調査対象とする。「言ひ合ふ」「言ひいとなむ」のように、動詞の連用形に動詞が続いた複合語は、調査対象としない。ただし、動詞と動詞の間に助詞が入った「言ひも果てず」「言ひなどす」の場合は、複合語とはせず、前項「言ふ」と後項「果つ」「す」に分けて、前項の「言ふ」を調査対象とする^①。

また、「いはく」は「言ふ」に「ク」がついて全体が名詞化される用法であるが、「言ふ」の用例に含める。「いはく」は『とはずがたり』では2例見られ、いずれも「いはく一言ふ」の構造で見られる^②。

(1) 坊主諫めていはく、「一度二度にあらず。さのみかくすべからず」と言ふ。(V489-14)

(2) 今の小法師いはく、「このほどの情け、忘れがたし。さらばわが住みかへ、いざたまへ、見に」と言ふ。(V490-2)

3. 『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法

3.1 活用形による分類

『とはずがたり』において、「言ふ」は464例見られる。まず、活用形による分類の結果を〈表1〉に挙げる。

〈表1〉 活用形による分類

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	合計
用例数	63	77	60	221	42	1	464
百分率	13.6%	16.6%	12.9%	47.6%	9.1%	0.2%	100.0%

動詞は、連用形が多く出現するのが一般的であるが、『とはずがたり』における「言ふ」については、連体形が47.6%で最も多く、「言ふ」全体の約半分を占める。命令形の1例は、「言へれば」の形で完了の助動詞「り」を伴っているものである。「言ふ」の已然形は42例であるが、その出現形は「言へども」が16例、「言へば」が26例である。「言へども」16例のうち、(3)のように実際の発言を受けているのは、5例のみであり、(4)のように「小野小町は衣通姫の流れを引く女性であるといっても」という意味になって、接続詞的に用いられている例が11例見られる。「言へば」の26例は(5)のように、すべて実際の発言を受けていた。

(3) 二人になりぬれば、人も、「いかなることにか」と言へども、「ことさらなることにてはなし。ならばぬ旅の苦しさに、持病の起こりたるなり」とて (IV434-

『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法

入 江 さ や か

『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法

1. はじめに

「言ふ」は、「『これ着よ』と言ふ」のように声を出して語や文を発したり、音声、あるいは文字で書かれた文章によって、考えや事柄を表明したりするという具体的な動作性を示す用法と同時に、「二条といふ名」の「言ふ」のように、実際に話すという具体的な動作性が弱まった形式的な用法も古くから持つ。このような形式的な用法は「語る」や「話す」にはない。

本稿は、鎌倉時代成立の『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法について、分類、記述をし、その意味・用法ごとの用例数を挙げることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 調査資料

本稿で使用する『とはずがたり』のテキストは、次の通りである。

久保田淳校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』小学館（以下、『新編』と称する。）『とはずがたり』の底本は現在のところ孤本である宮内庁書陵部蔵本（五冊）を用いている。なお、辻村敏樹編（1992）『とはずがたり総索引』【自立語篇】も適宜、参照する。

2.2 調査の手順

『とはずがたり』に用いられている「言ふ」の用例をすべて抜き出し、意味・用法の記述、分類を行う。用例を記す際は、『新編』の本文で「言ふ」が用いられている箇所を抜き出し、（巻、頁数、行）の順で記す。（V490-1）は巻五490頁、1行目ということである。